

こいぶみの前身「ひろしまる倶楽部」の表紙を飾ってくださったみなさんを、10年経過した今、再び訪れて「今」を話していただきました。

## 思ったように育てば やっぱり嬉しい

安佐北区深川  
折手 正昭さん

安佐北区深川に折手正昭さんの圃場があります。折手さんは、父親から受け継いだ農地約8ヶで、妻の正子さんとともに、水稲と、秋冬はコカブ、夏はイチジク、少量ですが季節に応じてシュンギクやレンコンを栽培しています。

就農前は、自動車の組み立ての仕事に従事していた折手さん。定年まで勤めた後、就農し、今年で25年目を迎えます。就農当初からコカブとイチジクを栽培していますが、特

に力を入れてきたのがイチジクです。外部への視察研修や毎年の経験則をもとに技術を習

得した折手さんは、産地を盛り上げたいと高陽農事研究会高陽イチジク部会の尾澤春生部会長とともに、会員の栽培技術の向上や生産振興に励んできました。

高陽イチジクの最盛期は8月下旬から9月末。この時期は朝4時から手元灯りを携え、毎日、収穫作業を行います。「多いときは1シーズンで1000パック(6個入)出荷したよ」と折手さん。生産量でも産地を支えてきました。

折手さんは、土づくりと芽かき作業を大切にしています。12月に寒肥を施用する際、一般的には稲わらを樹の根本に敷きますが、折手さんは自家製のもみ殻を敷きます。ま



2021

た、暖かくなってから芽吹く新芽は、40cm程度の間隔をあけて20本ある樹すべてで芽かきをします。「土に養分を与え、実となる芽に光を当て、風通しを良くしておくこと天敵のカミキリムシが寄ってこない」と折手さん。手間を惜しまない管理の甲斐もあり、栽培期間中に防除を行うことはほとんどありません。

折手さんや部会の会員が生産したイチジクは、朝採れのイチジクとしてファンも多く、集荷場所の深川支店からほど近いマックスバリュ高陽店で販売しています。

農業やイチジク栽培の魅力を同うと「気象条件は毎年変わる。それでも思ったような



▲就農当初に植えた25年生のイチジクの樹のうち3本は、今でも大きな実をつけます。

▲剪定したイチジクの枝と長年愛用している剪定バサミ。



2011

